

「個に応じる指導」と「個別最適化された学び」

千葉大学教育学部特任教授 ^{あまがさ しげる} 天笠 茂

1 「個に応じる指導」をめぐって

第一線を間もなく退かれようとする世代の方々の中で、『小学校教育課程一般指導資料Ⅲ－個人差に応じる学習指導事例集－』と称する“指導資料”が文部省（当時）より発刊されたことについて記憶はいかがであろうか。1984（昭和59）年12月10日付けとある。

本書は、「ゆとりと充実」や学校裁量の時間などを掲げた1977（昭和52）年告示の学習指導要領の実施のためにまとめられた三つの指導書のうちの一つである。個を理解し、個に応じることへの基本的な考え方が説かれ、24の事例が収められている。

当時、指導の個別化・個性化とか、個に応じることが言われ始めた時代である。先進校の取組も注目を集め、このテーマに文部省も向き合ったとして事例集に多くの関心が寄せられた。ある意味、「個に応じる指導」に関わる教育課程行政は、この事例集が一つの転機をもたらしたといっても過言ではない。

その「個に応じる指導」が、一つの用語として学習指導要領総則の配慮事項に取り上げられるのは1989（平成元）年改訂からであり、その後、引き継がれていく。

2003（平成15）年の一部改正では、1998（平成10）年改訂で「個に応じる指導」の例とした個別指導、グループ別指導、繰り返し指導、教師による協力的な指導に加えて、学習内容の習熟に応じた指導、興味・関心に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導、などが示された。

そして、2008（平成20）年改訂の学習指導要領へと継承された。

そのような経過を経て、このたびの改訂に至り、「個に応じる指導」は新たな局面を迎えることになった。これまであった配慮事項も「個に応じる指導」も学習指導要領からは消えたものの、それは、「個に応じる指導」の後退を意味するものではなく、総則の抜本的な見直しに伴う学習指導要領上の位置付け、及び、その構造的な転換によるものであった。

新たに登場した「主体的・対話的で深い学び」を支え実質化を図るのが「個に応じる指導」に関わるノウハウであり、その意味で、両者は通底しているとも言える。まさに、「個に応じる指導」は、「主体的・対話的で深い学び」において、全面的に展開を図る場を得たとみることができる。

2 「個別最適化された学び」ということ

一方、現在、Society5.0時代に求められる資質・能力の育成のためとして、新しい学習指導要領の着実な実施、先端技術の効果的な活用、その一環としてGIGAスクール構想などが打ち出されている。その際、掲げられたフレーズが、「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」である。

文科省内に設置された「Society5.0に向けた人材育成に関わる大臣懇談会」において、2018（平成30）年、6月5日、「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」とのテーマの下、Society5.0時代にお

ける学校や学びについて、次のような意見交換がなされた。

まずは、学校の現状を“一斉一律授業の学校”としてとらえ、これを“個人の進度や能力、関心に応じた学びの場”に変えていく必要がある。また、“同一学年集団の学習”については、“学習到達度や学習課題等に応じた異年齢・異学年集団での協働学習の拡大”を図る必要がある、さらに、“教室での学習”では、“大学、研究機関、企業、NPO、教育文化スポーツ施設等も活用した多様な学習プログラム”が学習支援の一環として求められる。

これらの具体化には、一単位時間をはじめ日課表や週時程の時間設計や運用の見直しが問われることになる。ただ、学年の枠組みに手をつけることに慎重な現状をどこまで乗り越えられるか。更に、教育内容を学年ごとに示す学習指導要領の在り方が問われることになる。

「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」は、これらの課題の克服を通して学校や教室の学びの変革を目指す象徴的なフレーズとされたわけである。

「個別最適化された学び」は、学習者の興味や関心、経験や性格、学習速度、学習方法などに応じることが、また、学習者自身による学ぶ方法の選択や学び直しが強調される。

それは、「個に応じる指導」の下に学びの在り方を追究してきた取組と符合するところも少なくなく、親和性をもったものとしてとらえることができる。ただし、「個に応じる指導」は、一斉授業の改善を意識しつつ、現行の組織や制度の枠組みを前提に取組がなされてきたのに対し、「個別最適化された学び」は、学びの変革に向けてICT環境の整備を意識しつつ、組織や制度の見直しもためらわない志向性を有している。すなわち、「個別最

適化された学び」は、「個に応じる指導」の流れを汲みつつも、方法上の工夫・改善にとどまらず、制度的改変を含む局面の展開を目指している点にも注目したい。

3 学校として授業改善への三つのステップ

そこで、学校として「個別最適化された学び」に向けた見通し、すなわち経営戦略について、一斉授業の改善に向けた三つのステップとして描いておきたい。

第1のステップは、一斉授業の中で個に応じ、個を生かす工夫である。はじめに紹介した事例集も、ねらいは一斉授業の改善にあったわけで、収録された事例の多くが、その工夫の紹介にあったことから明らかである。まずは、個に応じる観点から、一斉授業の改善に努めることを学校の授業改善の基盤づくりとして位置付けたい。

第2のステップは、「個に応じる指導」として蓄積されてきたノウハウの学習と、子供や学校の実態に応じた活用である。様々になされてきた取組の中のどのような手法が、わが校の子供たちの実態に即しているか、それを診断し、活用を図ることである。

第3ステップは、「個別最適化された学び」への取組である。まずは、「個別最適化された学び」のイメージづくりであり、それは、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が目指す学習の在り方と多分に重なる。学習者が、知識を関連付けて深く理解したり、考えを形成したり、自分なりに課題を見付けて解決に取り組んだり、主体的に学ぶ過程を重視する学びの実現を目指す。そのような学びを生み出すために、学校の組織や制度の柔軟な運用や見直しをも視野に収めつつ、学習の内容や方法の開発が求められることになる。